

紙腔琴の歴史

金子 敦子

はじめに

戸田欽堂（1850 - 1890）により明治17年（1884）に考案された紙腔琴は、明治時代には「音楽器」、「楽機」あるいは「発音機」等と称されていたようだが、その機能から見るとむしろ自動演奏装置といえる。紙腔琴は、明治17年から、その人気が衰退する明治30年代半ばまでの約20年間、基本的構造の改造は見られないものの、低廉化のための小型化や簡便化が行なわれながら多くの人々に親しまれた。紙腔琴はどのような状況の下で考案されたのか。なぜ流行したのか。本稿では紙腔琴の考案、発展の歴史、そして人気の理由を探ると同時に、紙腔琴を通して当時の日本の音楽状況を考える。

1 紙腔琴考案者 戸田欽堂

戸田欽堂¹は、嘉永3年（1850）、大垣藩主第9代戸田氏正と戸田の側室であった高島せん²との間に生まれた。せんは、横浜の豪商であり高島易断の祖である高島嘉右衛門の姉にあたる。戸田欽堂という名は号であり、欽堂のほかには鉄研、孤窟情仙、花柳粹史等の号を用いた。彼は、4年後の嘉永7年（1854）に4才で戸田家の分家である旗本の戸田監物の嗣子となった。

明治4年（1871）、21才の欽堂は異母弟の戸田氏共（第11代藩主）とともに渡米する。アメリカではニュージャージー州やニューヨーク州東部のトロイなどを訪れるが、一年余りで帰国する。戸田は渡米中にキリスト教に深く傾倒し、帰国後明治7年（1874）に宣教師 C. カラーザース（カローザス、カロゾルス）³ Christopher Carrothers（1840 - ?）から洗礼を受けたと伝えられている（太田 1989: 214）⁴。たとえ短期間とはいえ、この渡米は欽堂にとっては海外の思想や知識を身につけるための重要な経験であったと思われる。

戸田は明治7年に東京銀座3丁目に「九星堂」という唐物屋を開き、輸入品の販売を行なった。「九星堂」という名称は、戸田家の家紋である九曜の星に基づいたものである。さらにその隣に、キリスト教徒であった原胤昭^{たねあき}と共同出資で、日本で最初のキリスト教書店である「耶蘇教書肆十字屋」を開店し、聖書やキリスト教関係の書籍を販売した。「十字屋」という屋号は、キリスト教の十字架に由来する名称である。ちなみに、この年は切支丹禁制高札廃止の翌年であり、店の開店はかなり大胆な行動であったと思われる。戸田らは聖書販売のためにさまざまな方法を試みたが、その売れ行きは今ひとつであったらしい。

ところで、今日十字屋は楽器店として知られているが、十字屋が楽器に初めて関わったのは明治13年（1880）頃のことであった。当時の横浜には帰国する外国人の払い下げ品があり、原が、後に十字屋店主となる倉田繁太郎とともに横浜に出向いた折に1台の舶来製オルガンを見つけ、それを横浜日の出町の西川虎吉（1846 - 1920）に修理させ、さらにそのオルガンを真似て試作させたことに始まる。しかし、オルガンの売れ行きは芳しくなかったといわれる。その4年後の明治17年に、戸田が自ら考案した紙腔琴を十字屋の店先で演奏し、紙腔琴の珍しさに引かれて集まる人々に聖書を売ったところ、紙腔琴は注目を集め、大人気を得たのである。十字屋が楽器店として成功するきっかけを作ったのは、戸田欽堂の考案である紙腔琴の販売であったといわれる。

2 紙腔琴の考案と展開

紙腔琴の考案についてはさまざまな記述が見られるが、具体的にどのような説があるのか、また考案された紙腔琴はどのように展開したかについて見ることにする。

紙腔琴の考案について、明治17年(1884)12月9日の『東京日日新聞』に、「銀座三丁目の書肆十字屋にて売出す紙腔琴は戸田欽堂の発明にして」と記され、石井研堂は著書『明治事物起原』の中で、紙腔琴は「洋行帰りの戸田欽堂の発明といふ」と述べている(石井1997:285)。これらの記述によれば、紙腔琴は戸田欽堂が「発明」したことになる。また、明治26年(1893)に発行された『無師独奏紙腔琴』には、紙腔琴の製作動機についてさらに詳しく次のように書かれている(倉田1893:61)。

欽堂戸田先生當ニ文墨ヲ弄ブノ間楽韻ノ器ヲ好ミ博ク東西ノ音楽機構ニ通ジ泰西ノ機構ヲ参酌シテ破窓吟風ノ現象ヨリ奇器妙譜ノ案出ニ意ヲ用ヒ屢々器造ニ苦心シ音楽家上原六四郎ノ賛助ヲ得彼ノ本邦風琴製作家ノ鼻祖タル西川氏ノ妙腕ニ依リ百万審理験考ノ末遂ニ此ノ器ヲ案出セラレ…(後略) …

上記の記述によれば、紙腔琴は西洋の自動演奏装置の機構を参考にしながら、破れ窓に風が当たり音をたてる現象にヒントを得て考案され、音楽家の上原六四郎(1848-1913)や我が国の風琴(オルガン)製作者の始祖である西川虎吉(西川楽器製造所)の協力により発明されたものということになる。

一方、明治17年6月25日号の『郵便報知新聞』には、「是器は元と米国人の発明にして変して我邦の曲譜を奏するに至るハ山人の創意」と記され、さらに安藤更生の『銀座細見』には「…(前略)…元来舶来物だが、これを日本風に改作して…(後略)…」と書かれている(安藤1977:244-245)。また、三浦は、「此の楽器は明治の初年にアメリカの宣教師ガルブルスといふものが、之を以て讚美歌を奏して居ったのを東京の戸田欽堂が之を日本唱歌に応用しやうと、上原六四郎と謀り、種々工夫の結果第三十七図の如きものが出来、栗原鋤雲が之に命名したもの」⁵(三浦1991:252)と述べているし、さらに赤井は「紙腔琴というオルゴールのような楽器が明治時代中期に流行していた。これはアメリカではオルガネットと呼ばれている玩具なのだが、東京のキリスト教書店、十字屋が明治17年ごろに売り出して大当たりした商品だった。アメリカ人宣教師のカラゾルスがもっていたものを参考にして、十字屋の戸田欽堂と音響学を学んだ上原六四郎がコピーしたものだったという。」(赤井1995:27)と記している。つまり、資料に見る限り、戸田が「発明した」とする説と「外国製品の模倣」とする説の2つの説が認められる。

このようにして戸田により考案され、西川楽器製造所で製造された紙腔琴は、明治17年6月23日に東京両国橋の中村楼⁶において披露され(『東京日日新聞』明治17年12月9日)、紙腔琴という名称は、上記のように当時郵便報知新聞社社長で学士会院の会員であった栗本鋤雲により命名された⁷。

以下、筆者が今回調査することのできた全11台の紙腔琴を中心に、構造の考察を行なう(表1)。

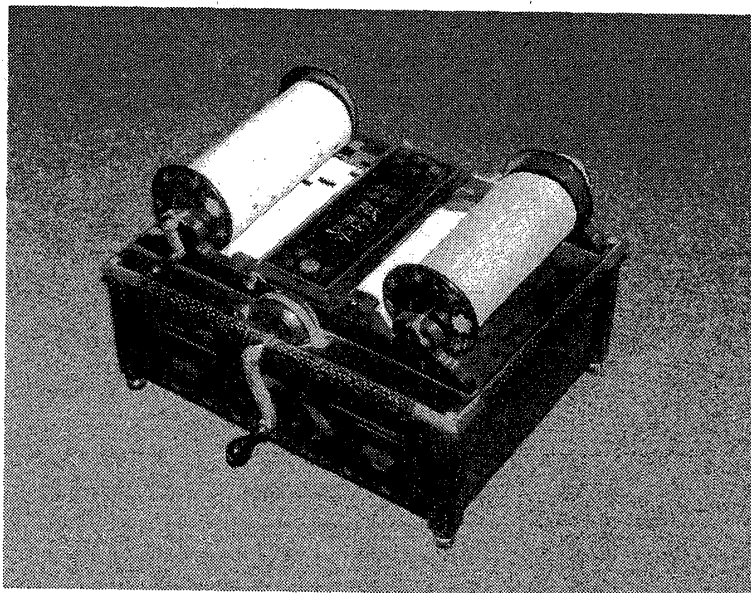
【表1】紙腔琴（含：大きさ）および紙腔琴ロール譜の所蔵一覧

所蔵博物館 () 内は台数	幅 (cm)	奥行き (cm)	高さ (cm)	所蔵ロール譜	備考
石川県立歴史博物館 (3)	40.0	39.0	32.0	《ゆふくれ》《越後獅子》《御新平》	
	39.0	32.0	26.0		
	38.0	33.0	32.0		
那須オルゴール美術館 (1)	31.0	26.0	19.0	《大祭祝日唱歌 君が代》《流行歌 梅が枝》《長唄 越後獅子》《長唄 舌出し三番瘦》《長唄 六段》《長唄 宵は待》《端歌 タぐれ》《端歌 十日ゑび寿》《端歌 我が物》	
萩史料館 (1)	39.0	30.0	18.0	《地唄 くらかみ》《端歌 京の四季》	
伊豆オルゴール館 (1)	38.0	31.0	22.0	判読不明	
富士美術館 (1)	39.5	40.0	27.5	《さくら》《端歌 お江戸日本橋》《端歌 夕暮れ》	奥行きは把手を含む／高さはロールを含む
日本大正村 (2)	39.5	32.0	18.0	《地唄 京の四季》《大祭祝日唱歌 神嘗祭》《大祭祝日唱歌 新嘗祭》《大祭祝日唱歌 元始祭》《一月一日》《端歌 タぐれ》《唱歌 織里なす錦》《流行歌 梅が枝》《端歌 十日ゑび寿》《長唄 宵はまち》《流行歌 満里うた》	1台のみ測定可
国立音楽大学楽器学資料館 (1)	—	—	—	全 35 曲 (曲名「無印」9 曲を含む) と「音階」のロール譜	
博物館明治村 (1)	40.0	32.0	28.0	《流行歌 まりうた》	

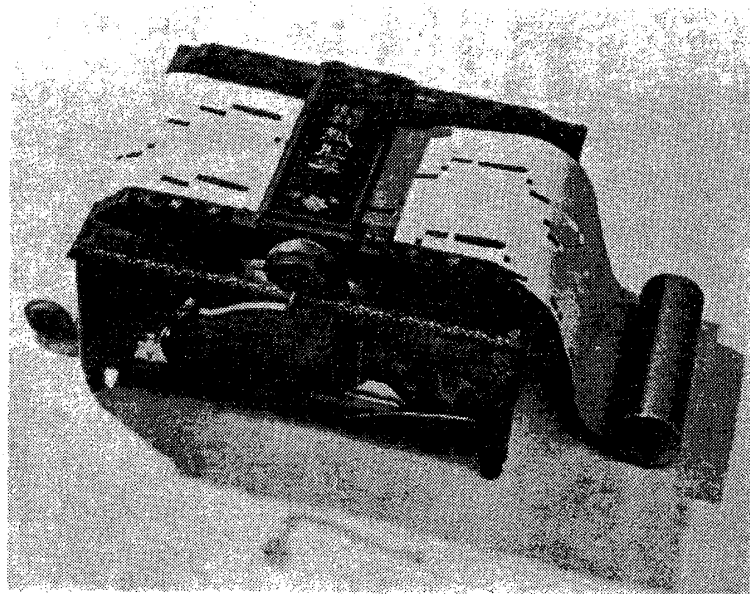
紙腔琴は大まかに発音部と共鳴箱から成っている。共鳴箱は、幅約 31～40 cm、奥行き約 26～40 cm、高さ約 18～32 cmの直方体の黒塗り（漆塗り）の箱型で、底板は密閉されており、前面と左右の側板には金蒔絵が施されている。この蒔絵は個々の楽器により異なり、たとえば「飛蝶文様」、「飛鳥文様」、「屋形船文様」、「桐葉文様」等がある。一方発音部は、直方体の器体の前面側板に取り付けられたクラックを時計回りに手で回すと、共鳴箱の中に装置されたオルガンペダルのような機構で鞆が動く仕組みになっている。そして箱の上面中央部には、縦に 14 個の小さな方形の孔が開けられており、その孔には金属製のリードが音階順に付された構造になっている。音域に関しては、筆者が調査することのできた紙腔琴⁸の場合は、「H-Cis-Dis-E-Fis-Gis-A-Ais-H-Cis-Dis-E-Fis-Gis」の 14 音であった。紙腔琴のリードについて、松本は「オルガン用リードを使用」と記している（松本 1998: 60）。ただし、この孔は取り外し可能な蓋で被われており、奏楽時には隠された状態になっている。クラックを回すと鞆が作動し、孔から空気を吸入しリードが響くという構造である。

一方、楽譜は穿孔ロール譜である。楽譜は当初「譜箋」、「活奏曲譜」などと称された。松本はロール譜について次のように説明している。「巻物は横幅十九センチ五ミリ、厚さ一ミリ弱、^{こうぞ}楮紙の三枚貼り合わせに^{どうき}礬砂をかけた。（注 ^{みょうばんにかわ}明礬と膠の水溶液でコーティングした）ロール（巻紙）に横幅七・五ミリの角穴をあける。隣の角穴との寸法は五ミリである」（松本 1998: 59 - 60）。上記の方形の孔と、リード部分の被い蓋の間にロール譜をはさみ、クラックを手で適宜の速度で時計まわりに回すと、ロール譜が左から右へ送られ、内装の鞆が作動して空気を送ると同時に孔の開いたところに空気が通ることにより孔に対応する音を発する（リードが鳴る）。なお、ロール譜の巻取りについては、巻取り車付きのものと巻取り車なしの 2 種がある（図 1、2）。さらに、明治 28 年（1895）以降に現われる、紙腔琴の類似品である紙調琴の楽譜にはエンドレスロール譜、つまり切れ目なく輪になっている楽譜も見られる⁹。な

お、このタイプの楽譜は巻取り車のない装置で演奏される。筆者の知る限り、現時点では紙腔琴に関してこの種のロール譜の存在は確認されていないが、紙調琴が紙腔琴を模倣した点を考慮すれば、エンドレスロール譜もまた、最初は紙腔琴用として作られていたと考えるべきであろう。



【図1】ロール譜巻取り車付きの紙腔琴—日本大正村所蔵—（撮影：金子敦子）

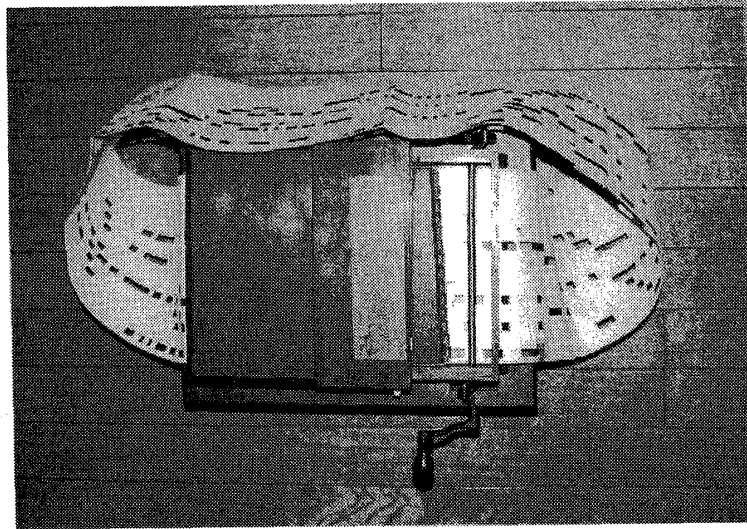


【図2】ロール譜巻取り車なしの紙腔琴（田辺1964：264）

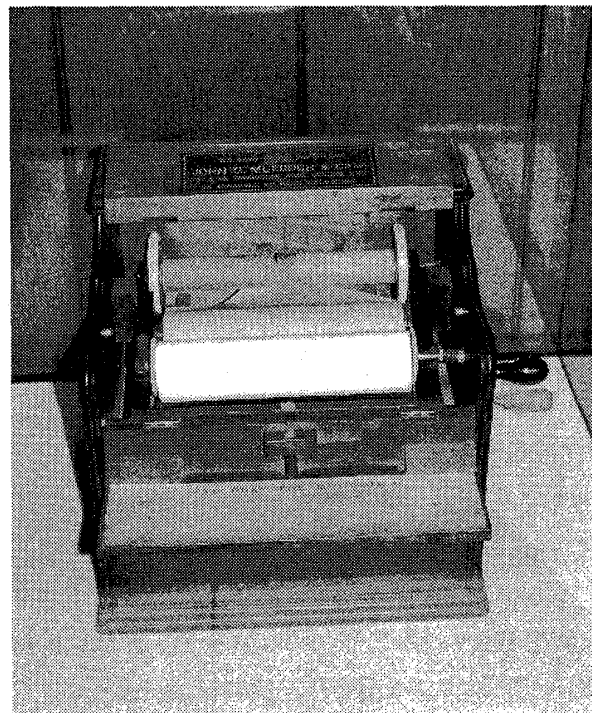
ところで、紙腔琴については戸田欽堂の発明とする説と、外国製品の模倣とする説の2つがあると先に述べた。この点について戸田が参考あるいはモデルとしたと思われるオルガネットという自動演奏装置について見てみたい。

オルガネットには2つのタイプがある。ひとつはロール譜・横送り型のオルガネット（以下、オルガネットと記す）である（図3）。筆者が調査することのできたものは¹⁰、1877 / 1878年に「Mechanical OrguINETTE社」（アメリカ）で製造されたもので、共鳴箱の大きさは、上箱は幅31.5 cm、奥行き24.0 cm、高さ6.5 cm、下箱は幅37.0 cm、奥行き31.0 cm、高さ9.5 cm、全体としては幅37.0 cm、奥行き31.0 cm、

高さ 19.5 cm（脚部分 3.5 cmを含む）である。また音階は「B-C-D-Es-F-G-Gis-A-B-C-D-Es-F-G」の 14 音となっている。上箱にリードが取り付けられており、下箱にはそのリードに対応して一列に孔が開けられ、その下に鞆装置が仕込まれている。そしてロール譜は上箱と下箱の間にセットされる。前面側板のクラックを時計回りに回すとロール譜が左から右へ横方向に送られ、それと同時に鞆が作動しリードに空気が送り込まれる構造である。



【図3】ロール譜・横送り型オルガネッタ—日本大正村所蔵—（撮影：金子敦子）



【図4】ロール譜・縦送り型オルガネッタ（メロディア）—日本大正村所蔵—（撮影：金子敦子）

もうひとつは、メロディアという名称の、ロール譜・縦送り型のオルガネッタ（以下、メロディアと記す）である（図4）。製作年は不明だが、楽器本体に「Mechanical OrguINETTE New York」と書かれているほか、「JOHN G. MURDOCH & CO. Lim.」¹¹ というラベルが貼られている。共鳴箱の大きさは、幅

32.0 cm、奥行き 27.5 cm、高さ 28.5 cm（いずれも最大サイズ）である。この装置では、ロール譜は前から後ろへ縦方向に送られる。ロール譜の 2 本の巻き取り棒の間にある横木に一列に孔が開けられ、そこにリードが取り付けられている。音階は「A-H-Cis-D-E-Fis-G-Gis-A-H-Cis-D-E-Fis」の 14 音である。右側側板のクランクを前から後ろへ回すと、鞆が作動すると同時に装置内部のロール譜が回転し、ロール譜の孔の部分からリードに空気が送り込まれて音が鳴る。なお、メロディアの場合はオルガネットとは異なり、ロール譜がリードの上にセットされる構造になっている。

これらの装置にはともにロール譜が用いられるが、ロール譜の幅はオルガネット用が 19.8 cm、メロディア用が 19.6 cm であり、その厚みについては前者が 0.23 mm で画用紙のような紙が用いられているのに対し、後者は 0.06 mm でパラフィン紙のような薄い紙である。またロール譜の方形の孔の大きさは、オルガネット用が横幅 8 mm であるのに対し、メロディア用は 5 mm とやや小さめである。さらにロール譜の巻取りについて、オルガネットのロール譜はエンドレスタイプであり、メロディアは巻取り式となっている。これらの装置および類似の装置は、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてアメリカやヨーロッパ諸国、たとえばイギリスやドイツ、フランスなどで数多く製造されていたらしい（Bowers 1972: 739 - 774）¹²。

紙腔琴とこれらの装置を比較すると、共鳴箱の形、装飾、ロール譜の紙質等、細部に関して相違が認められるものの、紙腔琴は構造的には特に「ロール譜・横送り型、14 音のオルガネット」に酷似しているといえる。渡米やキリスト教への改宗を通じて欧米文化に接触する機会の多かった戸田欽堂は、赤井の言うように、当時のキリスト教教会における讚美歌演奏に用いられたと思われる¹³ 上記のような装置を模倣して、紙腔琴を考案したと考えるのが妥当であろう¹⁴。その際、アメリカ人宣教師が持っていた装置は、「ロール譜・横送り型、14 音のオルガネット」であった可能性が高いと考えられる。

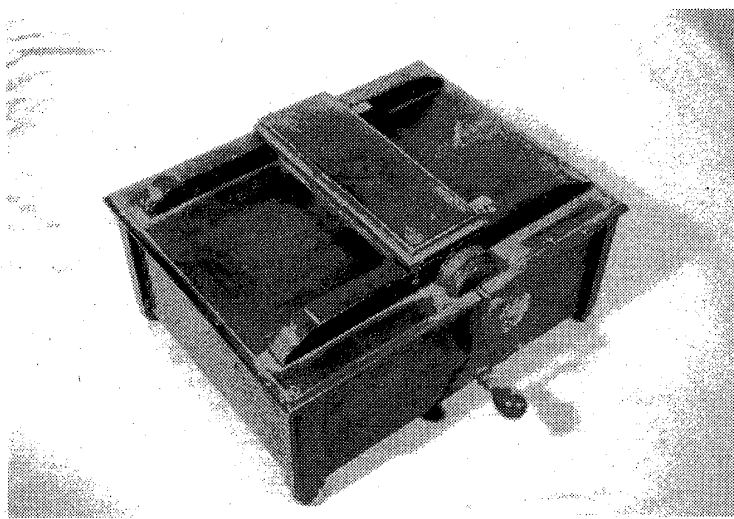
紙腔琴は時代の変遷とともにその機種が増し、それとともに演奏することのできる曲目も多くなってゆく。まずは、紙腔琴の機種増加について見てみる。

明治 17 年 12 月 9 日の『東京日日新聞』には、「金拾五円 但シ短譜箋四卷附」と 1 種類しか紹介されていない。しかし明治 21 年 8 月 1 日の『朝日新聞』には、「本構造譜箋四卷附金十五円、略構造譜箋四卷附金九円七十五銭」と 2 種類の紙腔琴が記され¹⁵、明治 22 年 9 月 3 日の『東京日日新聞』にも同様に 2 種の記述が見られる。そして 4 年後の明治 26 年（1893）8 月に出版された『無師独奏紙腔琴』には「並製定価金七円、小形上製定価金四円、小形並製定価金三元」¹⁶ の 3 機種が加えられ、全部で 5 種類の紙腔琴が掲載されている。さらに明治 27 年 10 月 5 日の『東京日日新聞』の広告には、「小形五円」が見られることから、この時点で 6 種類の紙腔琴があったことになる。特記すべきは、この間の明治 23 年（1890）の第 3 回内国博覧会後、紙腔琴が宮内省お買い上げとなった時点で（『東京日日新聞』明治 23 年 6 月 14 日）¹⁷ 紙腔琴は社会的に認知され、それが機種拡大の需要に拍車をかけたことである。

考案当初は 1 種類であった紙腔琴だが、明治 27 年には全部で 6 種類の紙腔琴が作られるようになったのである。これらの紙腔琴の相違は、主としてロール譜巻取り車の有無、共鳴箱の大小によるもので、大きさにより価格も異なっていた。紙腔琴の小型化と低廉化は、紙腔琴がそれまでのように比較的豊かな階層の人たちだけの楽しみの装置に限られるのではなく、その需要が庶民や子供レベルにまで広がった結果と言うことができよう。なお、紙腔琴の需要の拡大という点では、以下に記す類似品の出現も興味深い。

紙腔琴の類似品は、紙腔琴の機種が急速な拡大を見せる明治 26 年頃から見られるようになる。それらは商品名を変えて販売された。そのひとつが松本新吉（1865 - 1941）の考案した「紙巧琴」である。

紙腔琴の製造元である西川楽器製造所に6年間勤めた松本は、「まず手始めに紙腔琴を作り、名前を「紙巧琴」と変えて売り出した」（松本 1997: 61）という記述から、紙腔琴と紙巧琴の構造は同様で、名称のみが異なると考えられる。そして「松本紙巧琴と十字屋紙腔琴の曲譜は大型小型共に互換性があったらしい」（松本 1997: 60）。紙巧琴という名称が『音楽雑誌』に初めて現われるのは第50号（明治28年1月）であり、以後、第65号（明治30年1月）まで11回に渡り広告が掲載されている¹⁸。その他、明治30年3月10日と4月10日の『東京日日新聞』にも広告が見られる。紙腔琴と紙巧琴との相違点は価格である。紙巧琴も全部で6種類があり、価格はそれぞれ「大形金蒔絵特別製十二円 上製八円 並製六円 小形特別製四円五十銭 上製三円五十銭 並製二円五十銭」（『音楽雑誌』64: 表紙の次頁）のように設定されており、紙腔琴と比較するとわずかに安価である。さらに類似品には紙巧琴のほかに「紙風琴」や「紙調琴」などもあった。「紙風琴」¹⁹は明治28年（1895）に大阪市西区阿波座の関西舎風琴製造所で製作されたものであり（塩津 1995: 27）、「紙調琴」は、同じく明治28年に岩澤善三郎（東京市浅草区田原町2丁目27番地）により製作されたものである。紙調琴は、筆者が調査したところ、外見上も構造的にも紙腔琴（巻取り車なし）とはほぼ同じである（図5）。これらの類似品もまた余程に流布したものとみえ、十字屋は「粗悪の偽物御要心」²⁰、「同音異字の偽物続々現はる 御求の節十字屋製並に紙腔琴の名義に御注意あれ」²¹、「偽せ物あり欺かるゝ勿れ」²²と繰り返し人々に警告を与えている。このように、紙腔琴は明治30年代前半まで、類似品が出現するほどの大きな人気を集めた。



【図5】紙調琴—静岡県賀茂郡松崎町所蔵—（撮影：金子敦子）

その製造台数については「都合五千八百余尺の売高に達す」（石井 1997: 285）、すなわち5800台ほどの紙腔琴が、音楽学校や小学校に売れたと伝えられる（名村 1992: 71）。明治21年（1888）から明治35年（1902）までの大阪三木楽器店の山葉オルガンの販売台数の合計が3990台であることを考え合わせると（増井 1980: 23）、この数はかなりの数ということになる。なお、紙腔琴の販売所は北海道から鹿児島まで全国17箇所に及んだ（倉田 1893: 92 - 93）²³。十字屋広告文には「遠国御注文は着金次第急速御送申候」（『東京日日新聞』明治27年10月5日）という文章があり、さらに明治29年10月16日の『東京日日新聞』の広告には「運賃 大形百里以下卅二銭百里以上六十四銭 小形百里以下廿四銭百里以上四十八銭」と具体的な運賃が示されていることから、紙腔琴の全国展開を目指していた様子が伺える。事実、三浦俊三郎（? - 1937）はその辺の事情を、「汽車に十里も行かねば乗れぬ東北海岸の小

さな町で育った自分にも明治三十年当時既にこの楽器を弄んだ事を小さい記憶に存して居る」(三浦 1991: 253) と記していることからしても、紙腔琴は当時全国的にかなり普及していたものと考えられる。

3 紙腔琴のロール譜と曲目

前項で述べたオルガネットやメロディアでは、欧米諸国の音楽が奏でられたことは明らかである²⁴。一方、紙腔琴の場合はどうなのか。ここでは、紙腔琴のロール譜と曲目について見てみる。楽譜製作に関しては東京音楽学校の上原六四郎²⁵ (1848 - 1913) が関わったといわれるが、当時の日本で紙腔琴によりどのような曲が奏されたのだろうか。明治時代の新聞広告からロール譜に関する記事を以下に挙げる。

- … (前略) …教坊ニ流布スル長唄端歌俗箏等ノ諸曲ヲシテ悉皆意ノ如ク奏セシム… (後略) …
(『東京日日新聞』明治 17 年 12 月 9 日)
- 今回先生ノ允諾ヲ領シ弊舗ニ於テ該琴并ニ曲譜数十種ヲ製シ廉価ヲ以テ雅賞ニ応シ販売セントス
(『東京日日新聞』明治 17 年 12 月 9 日)
- … (前略) …文部省撰定の唱歌を始め教坊に流布せる長歌、端歌、琴歌、讚美歌、俗箏等の諸曲をして悉皆意の如く奏せしむ… (後略) … (『日日新聞』4963号) (倉田 1893: 75-76)
- … (前略) …春雨かっぱれ六段汐汲を始め何の歌にても意の如く奏せざるはなく… (後略) …
(『東京日日新聞』明治 22 年 9 月 3 日)
- 曲譜も数を加へて興味愈々備り長唄端歌琴歌常磐津清元地唄清楽唱歌其他何の曲にても悉皆意の如く奏で得ざるはなく…
(『東京日日新聞』明治 25 年 8 月 4 日)
- 銀婚式の祝歌を発売す
(『東京日日新聞』明治 27 年 3 月 8 日)
- … (前略) …長唄端歌常磐津は勿論如何なる秘曲も御茶の粉にて… (後略) …
(『東京日日新聞』明治 27 年 3 月 8 日)
- 勇壮活発なる軍歌軍楽数十出来
(『東京日日新聞』明治 27 年 10 月 5 日 / 12 月 5 日)
- 本器は誰人にも勇壮活発なる軍歌優美艶麗なる俗楽を習はずして奏曲のたのしみを自由ならしむる… (後略) …
(『東京日日新聞』明治 27 年 10 月 5 日)
- 本器は誰人にも長唄端歌清元地唄軍歌唱歌等奏曲の妙を自由ならしむる音楽器… (後略) …
(『東京日日新聞』明治 30 年 4 月 7 日)

明治 17 年 (1884) には文部省唱歌、長唄、端歌、琴唄、俗曲、讚美歌など数十種だったロール譜が、明治 25 年 (1892) になると「曲譜も数を加へて」その種類を増してゆく。ちなみに、『無師独奏紙腔琴』(明治 26) の「紙腔琴曲譜目録」には全 173 曲が掲載されている (倉田 1893: 70 - 71)。その内訳は、長唄 16 曲、琴歌 4 曲、清元 2 曲、常磐津 1 曲、端歌 16 曲、地歌 8 曲、流行歌 19 曲、清楽 14 曲、軍歌 19 曲、唱歌 34 曲、讚美歌 19 曲、聖歌集 21 曲である。明治 27 年 (1894) には明治天皇の銀婚式を祝って「銀婚式の祝歌」のロール譜が製作され (『東京日日新聞』明治 27 年 3 月 8 日)、日清戦争の影響からか「勇壮活発なる軍歌軍楽」のロール譜も「数十」作られ、ロール譜の数は増加の一途をたどる。そして、明治 41 年 (1908) の十字屋広告には「曲譜長唄流行歌軍歌唱歌等数百種あり」(『音楽世界』明治 41 年 5 月号: 裏表紙) と記されており、つまりロール譜の数は 20 数年間に数十曲から数百曲まで増加したのである。

紙腔琴のロール譜は 1 巻 5 銭から 1 円 50 銭程度で、主に東京銀座の十字屋で製作されていた²⁶。な

お、機種によっては短いロール譜付きで販売されていたものもある²⁷。このように紙腔琴の機種が増加する一方でロール譜の曲種も増し、紙腔琴は幅広い層を対象に普及してゆくことになる。

以下、文献資料および筆者の調査の結果、確認することのできたロール譜の曲名を挙げる (全 50 曲)。曲名はロール譜の表示通りとする。

【長唄】《越後獅子》《老い松》《汐汲》《舌出し三番叟》《宵は待》

【琴歌】《六段》

【端歌】《大津絵》《京の四季》《十日ゑび寿》《夕ぐれ／ゆふくれ》《我が物》《お江戸日本橋》《さくら》《春さめ》《松づくし》

【地唄】《京の四季》《御所車》《くろかみ》《ゆき》《こすのと》《すりばち》

【流行歌】《伊勢音頭》《梅が枝》《梅にも春》《梅は咲いたか》《かつぼれ》《かんかんのう》《金びら船々》《きんらいぶし》《こいといふたとて》《高い山から》《トコトンヤレ》《ちょんきな》《ひとつとや》《満里うた》

【軍歌】《功戦》《来れや来れ》《雪の進軍》《四百余州》

【清楽】《金線花》

【唱歌】《あまつひかげ》《織里なす錦》《霞か雲か》《ほたるの光り》

【大祭祝日唱歌】《一月一日》《神嘗祭》《紀元節》《君が代》《元始祭》《新嘗祭》

一般にロール譜には製作年が明記されていないため、何年に作られたものなのかはわからない。しかし、上に挙げた大祭祝日唱歌のロール譜は、明治 26 年 (1893) 8 月 12 日に文部省が告示した「小学校祝祭日大祭儀式規定」の公布により 8 曲が定められたことを受けて作られたものと考えられるし、軍歌軍楽は日清戦争前後の国歌主義・軍国主義的風潮の中で作られたことは明らかである。

なお、前述の調査²⁸の折に筆者が確認した紙調琴のロール譜もここに参考までに記しておく (全 34 巻)。曲名はロール譜の表示通りに記す。

【長唄】《あけのかね》《安宅》《越後獅子》《老松》《上の巻 勸進帳》《喜セン》《吉原雀》

【琴歌】《八千代獅子》

【端歌】《縁かいな》《大津絵》《紀伊ノ国》《十日恵比寿》《? + 紀伊ノ国 + 我が物》(3 曲メドレー) 《雪は登もへ》

【地唄】《黒か美》

【流行歌】《おまへまちまち》《一つトヤ》《美やさん》

【唱歌】《鏡奈す》《金剛石》《蝶々とんぼ》《春の弥生》《毬》

【清楽】《月花集》《月琴集》《砂窓》《茉莉花》

【清元節】《梅の春》

【常磐津節】《将門》

【その他】《花咲寿》《世んば?》、タイトルのないロール譜が 3 巻

(上記のうち《越後獅子》《蝶々とんぼ》《一つトヤ》の 3 曲は、エンドレスのロール譜である。)

『無師独奏紙腔琴』の「紙腔琴曲譜目録」には、日本の音楽と清楽の他に讃美歌と聖歌のロール譜が挙げられているが、今回筆者の確認することのできたロール譜の曲目は、紙腔琴の場合もまた紙調琴の場合も、ほとんどすべて日本の音楽と清楽である点は注目に値する。讃美歌や聖歌は宗教的なものであ

ることから、一部の限られた人たちの間でのみ用いられた可能性が高い。

以上、本章で述べてきた紙腔琴の機種種の拡大とロール譜の増加をまとめると、表2のようになる。

【表2】紙腔琴の発展

年代	紙腔琴の機種	ロール譜の種類	備考(出来事)
明治17年(1884)	1種	唱歌、長唄、端歌、琴唄、俗曲、讚美歌など数十種	紙腔琴発売
明治21年(1888)	2種		
明治23年(1890)			第3回内国博出品(褒賞受賞) /宮内省お買い上げ
明治25年(1892)		ロール譜の数が増加 長唄、端歌、常磐津、清元、地歌、清楽、唱歌、その他	
明治26年(1893)	5種	大祭祝日唱歌のロール譜の製作	紙腔琴の類似品の出現 /祝祭日儀式唱歌の制定
明治27年(1894)	6種	銀婚式の祝い歌、軍歌軍楽のロール譜数十の製作	日清戦争開戦
明治28年(1895)			第4回内国博に出品/紙巧琴(6種)、紙調琴、紙風琴等の考案
明治30年(1897)		長唄、端歌、清元、地唄、軍歌、唱歌など	
明治41年(1908)		長唄、流行歌、軍歌、唱歌など数百種	

結論 紙腔琴の普及の意味

紙腔琴が考案された当時、欧米諸国でオルガネットやその類似楽器が大流行していたこと、また、戸田欽堂がキリスト教を通じて欧米諸国と深い関わりを持っていたこと、さらに紙腔琴の構造の点から考えて、紙腔琴は基本的に欧米諸国の装置を模倣したと推察される。しかし、その発売に際してのソフト面、つまり演奏曲目に関しては日本の音楽や清楽が中心であった。ここでは、前項の内容に基づきながら紙腔琴の展開についてまとめ、どのような経緯で紙腔琴が全国に普及していったのかを考察すると同時に、紙腔琴を通して明治時代の日本の音楽状況について考える。

表2に基づいて、紙腔琴の発展について分析すると次のようなことがいえる。上述のように紙腔琴の人気上昇のきっかけとしては、明治23年(1890)に東京上野で開かれた第3回内国勸業博覧会での褒賞受賞およびその後の宮内省による紙腔琴の購入が考えられる。このことに関して十字屋は、「曩に宮中の御用を賜り特に第三回内国勸業博覧会に於て賞状を拝受せり」と宣伝している(『東京日日新聞』明治27年3月8日)。さらに、明治28年(1895)に京都の岡崎公園で開催された第4回内国勸業博覧会にも紙腔琴は出品され(早稲田大学 Web サイト: http://cork.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko10/b10_8033_25/)²⁹、「大博覧会都度受賞の大名譽を得ざる事なき名器」(『東京日日新聞』明治29年7月11日)と名譽を誇っている。

当時の紙腔琴の用いられ方を見ると、「淑女紳士の歌宴舞席は言も更なり獨り幽逸を好むの日に弄び心耳を楽ましむ古今無比の名琴なり」(『東京日日新聞』明治22年9月3日)、あるいは「新年宴会等に欠べからざる良品」(『東京日日新聞』明治23年1月3日)等の記述から、宴会の席で楽しんだり、またひとり静かに音楽を聞く時に用いられた様子が伺える。なお、持ち運びに便利という点から「避暑遊浴の好伴侶」(『東京日日新聞』明治25年3月8日)という宣伝文句も見られた。また、明治26年5月28日の『東京日日新聞』には「江州山中製糸場に於ては工女の勞を慰する為め近頃流行する紙腔琴を寄宿所に備へ休業時間には之を調べしむる」と書かれており、紙腔琴による音楽は慰労という目的でも

用いられたようである。さらに上述のロール譜の中に大祭祝日唱歌として6曲が認められたが、明治26年に公布された「小学校祝祭日大祭儀式規程」により定められた唱歌を式典で歌う際に、オルガンの代りに歌の伴奏装置として紙腔琴が用いられたことが推測される。当時の音楽教育の場における主要楽器はオルガンであったが、オルガンに比べて手軽で安価なうえ³⁰、オルガンとよく似た音色の紙腔琴は、オルガンの代用機としても利用価値の高い「音楽機」であったのだろう。一方、明治27年(1894)の日清戦争を機に、紙腔琴で軍歌を奏で、それにあわせて吟唱すれば、「忠実勇武なる我國民の志気を振気し忠君愛国の念虜を鼓舞振興し敵愾の思想を奮興するに足る」(『東京日日新聞』明治27年10月5日/12月5日)と戦意鼓舞における紙腔琴の有用性が宣伝されている。また時には「紙腔琴奏曲之図」(倉田1893:表紙の次頁)に見られるように、家族で紙腔琴から流れる音楽に耳を傾けることもあった。

このように紙腔琴は、「無師独奏」、すなわち演奏技術がなくても、ロール譜を装置にセットしてクラックを回せば、誰にでも簡単に音楽を楽しむことができたため、さまざまな場で種々の目的のために用いられた。「音楽を聴き歌う」という習慣をもっていなかった当時の一般の人々にとっては、紙腔琴から流れる音楽に耳を傾けること、また上述のように紙腔琴から流れる音楽に合わせて吟唱することは、新鮮でかつ大きな楽しみであったと思われる。つまり、紙腔琴には音楽を聴くためばかりではなく、大勢が声を合わせて歌うための伴奏装置という使用法もあったのである。ちなみに、明治26年発行の『無師独奏紙腔琴』は「歌詞集」である。しかし、紙腔琴は、1877年(明治10)にT.A.エジソン Thomas Alva Edison (1847-1931)により発明され、明治後半頃に日本にも導入された類似の音楽再生機である蓄音機³¹の性能に圧されて、独自の特性に基づく差別化の再開発を果たせぬまま人気は急速に衰退の傾向をたどることになる。

明治時代を迎えた日本は、国策として洋楽普及を推進してきた。しかし、見てきたように調査した限りでは、明治時代の世間一般において人々がこの洋風装置の模倣品によって楽しんだ音楽のほとんどが日本の音楽や清楽であった。つまり、その時代の人々にとって身近で親しみ易い音楽はまだ日本音楽および清楽で、洋楽は多くの人々にとってはまだ馴染み難い存在であったと考えられる。そこには、洋風装置、西洋音階を用いながら、それで聴く音楽は日本のものという、いわゆる和洋折衷の文化状況があったと考えられるのである。一方、紙腔琴は日本の人々がそれまで経験することのなかった「音楽を聴く」こと、「伴奏に合わせて歌う」ことの喜びを機能的にも経済的にも手軽に享受することのできる音楽再生機であった点、当時の日本において、蓄音機の「先駆装置」として音楽の普及と大衆化に果たした役割は大きなものがあったと考えられる。

注

¹ 幼名唯之助、後に三郎四郎氏益と改め、維新後は欽堂と名乗る。

² 高島家の系図上は高島キテ。

³ アメリカ・オハイオ州生まれ。アメリカ長老派教会派遣の宣教師。明治2年(1869)に来日。

⁴ 初版は明治41年(1908)。出版社：橋南堂。

⁵ ガルブルスとはカロゾルスである可能性が高く、また栗原鋤雲は栗本鋤雲の誤りと思われる。第三十七図とは、本文中の挿図を指す。

⁶ 酒樓。

⁷ 明治26年発行の『無師独奏紙腔琴』には、「郵便報知新聞社長学士会院会員栗本鋤雲先生首メテ此ノ器ニ紙腔琴ノ名称ヲ附セラル蓋シ未ダ適切ノ題詞ヲ定メザリシテ」と書かれている。

⁸ 岐阜県明智村の日本大正村に所蔵されている紙腔琴。筆者は2006年4月26日に実地調査を行なった。

⁹ 紙腔琴の類似品のひとつである紙調琴およびそのロール譜全 34 巻が、2006 年 4 月初旬に静岡県賀茂郡松崎町の旧商家「伊豆文邸」で発見された（『静岡新聞』2006 年 4 月 15 日）。筆者は 2006 年 4 月 14 日に実地調査を行なった。

¹⁰ オルガネットとメロディアは岐阜県明智町の日本大正村に所蔵されている。筆者は 2006 年 4 月 26 日に実地調査を行なった。オルガネットの本体には次のように記されている。「Patented Everywhere The National Mechanical OrguINETTE Sold by The National Fine Art Association Ware Houses Farringdon Ro. London, E. C.」。

¹¹ 住所：91Z93, FARRINGDON ROAD, LONDON, E.C. and 23, LONSDALE ST. EAST, MELBOURNE.

¹² さまざまなオルガネットについて詳述されている。なお、オルガネットの音域は 14 から 20 音が一般的である。

¹³ 自動演奏装置のひとつであるバレル・オルガンは、小さくて貧しい教会においてオルガンのかわりに使用された。また、イギリスのフライト・ロブソン社は、多くの教会向け自動演奏装置（バレル・オルガン）を製造し、それらにより詩編やプレリュード、讃美歌を演奏した（ブーフナー 1993: 544）。

¹⁴ 確認はできないが、上述の赤井が「アメリカ人宣教師カラゾルス」と言っている人物は、戸田が帰朝後洗礼を受けた宣教師 C. カラーザース（カラーザス、カロゾルス）と同一人物であることは十分に推測できることと思われる。

¹⁵ 本構造は高さ 9 寸 3 分、長さ 1 尺 3 寸、横幅 1 尺 3 分、ロール譜巻取り車付きである。略構造は高さ 7 寸、長さ 1 尺 3 寸、横幅 1 尺 3 分、ロール譜巻取り車がない（倉田 1893: 62-63）。

¹⁶ 並製紙腔琴の大きさは高さ 7 寸、長さ 1 尺 3 寸、横幅 1 尺 3 分、ロール譜巻取り車なしで、本構造および略構造の紙腔琴とは材質が異なる（倉田 1893: 64）。一方小形紙腔琴は、本構造、略構造、並製の紙腔琴とは「全く趣きを異にし」、音数が少なく奏楽曲も限られた。大きさは高さ 6 寸、長さ 1 尺 3 分、横幅 9 寸 3 分、ロール譜巻取り車はない。これは子供用の紙腔琴であつたらしい。ロール譜も一般のものより小さく、小形並製には《夕ぐれ》《まりうた》《ちょんきな》《かんかんのふ》《梅が枝》の 5 曲のロール譜、小形上製紙腔琴にはそれら 5 曲に《とことんやれ》を加えて販売されていた（倉田 1893: 65）。

¹⁷ 『東京日日新聞』（明治 23 年 6 月 24 日）に、「銀座三丁目十字屋より内国勸業博覧会へ出品せし紙腔琴は過日宮内省へ御買上げなりしよし」という記事が掲載されている。

¹⁸ 以下の『音楽雑誌』に広告が掲載されている。『音楽雑誌』50: 36、51: 18、52: 27、53: 裏表紙の裏、54: 23、55: 25、56: 28、57: 33、58: 35、64: 表紙の次頁、65: 表紙の次頁。

¹⁹ 紙風琴の詳細については不明。

²⁰ この広告は明治 30 年 4 月 7 日『東京日日新聞』、『音楽雑誌』57: 裏表紙、58: 裏表紙、60v46 等に見られる。

²¹ この警告は『音楽雑誌』52: 裏表紙、53: 23、54: 28 に見られる。

²² この警告は『音楽雑誌』36: 31、38: 26、39: 26、40: 31、41: 25、42: 28、43: 27、44: 27、45: 12、46: 21、47: 21、48: 18、49: 18、50: 14、51: 21 に見られる。

²³ 東京 3 箇所、北海道と横浜が各 2 箇所、その他仙台、長野、山形、新潟、京都、大阪、神戸、高松、熊本、鹿児島各 1 箇所、合計 17 箇所に販売所があった。

²⁴ たとえば、日本大正村所蔵のメロディアには、J.S.バッハの《Menuett》のロール譜がセットされている。

²⁵ 音楽理論家、物理学者、尺八家。東京音楽学校では、多年にわたり音響学と音楽史を担当した。

- ²⁶ ロール譜に、製造販売元として「琴声館」(大阪市西区新町南通)と書かれているものもある。
- ²⁷ 注16参照。本構造、略構造、並製の紙腔琴には《夕ぐれ》《宵はまち》《十日恵びす》《まりうた》の4曲のロール譜が付けられていた。
- ²⁸ 注9参照。
- ²⁹ 紙腔琴が第4回内国勸業博覧会に出品された際のちらし広告が掲載されている。
- ³⁰ オルガンの最廉価型が18円の頃、紙腔琴は3円だった(平野2004:17)。
- ³¹ 明治36年(1903)から蓄音機が日本に輸入されるようになる。国産蓄音機の製造は明治42年(1909)から始まる。

参考・引用文献 (著者名の50音順)

- 赤井勲 1995 『オルガンの文化史』 東京：青弓社。
- 網干清一 1984 「音響機器工業」下中邦彦(編)『大百科事典』 東京：平凡社 2:1223。
- 安藤更正 1977 『銀座細見』(中公文庫) 東京：中央公論社。
- 石井研堂 1997 『明治事物起原 3』 東京：ちくま学芸文庫。
- 市古貞次；浅井清；久保田淳ほか(編) 1996 『日本文化総合年表』 東京：岩波書店。
- 太田愛人 1989 『開化の築地・民権の銀座—築地バンドの人びと』 東京：築地書館。
- 久米三千雄 1984 「戸田欽堂とキリスト教」『月刊 西美濃わが街』 愛知：月刊西美濃わが街社 87:18-21。
- 倉田繁太郎(編) 1893 『無師独奏紙腔琴』 東京：十字屋音楽部。
- 倉田喜弘；藤波隆之(編) 1995 『日本芸能人事典』 東京：三省堂。
- 塩津洋子 1995 「明治期の洋楽器製作」『大阪音楽大学音楽研究年報』13:5-36。
- 田辺尚雄 1964 『日本の楽器 日本の楽器事典』 東京：創思社。
- 名村明日子 2002 『螢の光のすべて』キングレコードCD(KICG3075)解説：表紙の裏、44-45。
- 名村義人 1992 『オルゴールの詩』 東京：音楽之友社。
- 日本基督教団(編) 1986 『キリスト教人名辞典』 東京：日本基督教団出版局。
- 檜山陸郎 1973 『楽器と人間』 東京：ミュージック・トレード社。
- 平野正裕 2004 「紙腔琴」『製造元祖 横浜風琴洋琴ものがたり』(企画展図録) 横浜市歴史博物館；横浜開港資料館 17。
- ブーフナー、アレクサンドル BUCHNER, Alexandr 1993 「自動演奏装置」名村義人(訳)柴田；遠山(編)『ニューグローヴ世界音楽大事典』 東京：講談社 7:541-546。
- 堀内敬三 1968 『音楽明治百年史』 東京：音楽之友社。
- 1991 『音楽五十年史』 東京：大空社。
- 増井敬二(編著) 1980 『データ・音楽・にっぽん』 東京：民音音楽資料館。
- 松本雄二郎 1997 『明治の楽器製造者物語 西川虎吉 松本新吉』(私家版)。
- 松井幸子 1984 「戸田欽堂—開化の座標」『月刊 西美濃わが街』 愛知：月刊西美濃わが街社 87:22-27。
- 三浦俊三郎 1991 『本邦洋楽変遷史』 東京：大空社。
- 山田賢二 1984 「明治開化期の自由人 高島嘉右衛門と戸田欽堂」『月刊 西美濃わが街』 愛知：月刊西美濃わが街社 87:10-16。
- 吉岡勲(編著) 1980 「戸田欽堂」『郷土歴史人物事典 岐阜』 東京：第一法規出版 118-119。

BOWERS, Q. David 1972 *Encyclopedia of Automatic Musical Instruments*. Lanham; New York; Toronto; Oxford: Vestal Press.

雑誌

1984 復刻版『音楽雑誌』 東京：出版科学総合研究所. 第36号（明治26年9月）- 第67号（明治30年3月）.

1995 - 1997 復刻版『音楽界』 東京：大空社. 明治41年1月号 - 大正8年12月号.

1907 - 1910 『音楽世界』 京都：十字屋田中商店楽器部 明治40年（6、7、8、11月号）／明治41年（4、5、7、8、11、12月号）／明治42年（1、6、7、9、11、12月号）／明治43年（1、4月号）.

付記

本稿の脱稿後、博物館明治村の中野裕子学芸員より「三籟琴」という紙腔琴の類似品が所蔵されている旨の情報を頂いた。この楽器については今後調査する予定である。この一件をはじめ本稿を成すにあたり調査に快くご協力頂いた関係各位、および機関に深く感謝申し上げます。